

## 注目される種のカテゴリー（ランク）とその変更理由

## 哺乳類の注目される種のカテゴリー（ランク）と変更理由

ニホンカワウソ（北海道亜種） 絶滅危惧 I A 類(CR) ➤ 絶滅(EX)  
 ニホンカワウソ（本州以南亜種） 絶滅危惧 I A 類(CR) ➤ 絶滅(EX)

ニホンカワウソ（北海道亜種）とニホンカワウソ（本州以南亜種）は、最後の生息記録が前者では 1955 年、後者では 1979 年であり、いずれも 30 年以上が経過している。安藤（2008）は、過去の調査記録や目撃情報等を整理し、北海道亜種は 1950 年代、本州以南亜種は 1990 年代に絶滅したと考察した。ニホンカワウソのような中型の哺乳類が、人目に付かないまま長期間生息し続けていることは考えにくく、これまでの生息確認調査等の結果から絶滅したものと判断した。

ミヤココキクガシラコウモリ 絶滅危惧 I A 類(CR) ➤ 絶滅(EX)

ミヤココキクガシラコウモリは、1971 年の調査では 10 個体弱の生息を確認したが、以後 1977、1979、1985、1996 年の調査ではいずれも発見されていない。生息地である沖縄県宮古列島では、本種のような森林性のコウモリ類が生息しうる環境は非常に限られており、生息していればこれまでの調査によって発見されていると考えられる。これらのことから、ミヤココキクガシラコウモリは絶滅したものと判断した。

ゼニガタアザラシ 絶滅危惧 I B 類(EN) ➤ 絶滅危惧 II 類(VU)

海棲哺乳類のゼニガタアザラシは、北海道の襟裳岬から根室半島にかけて分布し、前回のリストでは絶滅危惧 I B 類 (EN) であった。しかし、最近の調査によって個体数の増加傾向が認められ、換毛期の 8 月頃には 900 頭以上が確認されるようになった。また、襟裳地域の個体群の状況は安定している事が知られている。こうした状況から、絶滅危惧 II 類 (VU) にランクを下げた。



提供:小林 万里 (東京農業大学)

トド 絶滅危惧 II 類(VU) ➤ 準絶滅危惧(NT)

海棲哺乳類のトドは主に北海道沿岸に来遊し、前回のリストでは絶滅危惧 II 類 (VU) であったが、平成 21 年度の水産庁調査では、およそ 5,800 頭が来遊していると推定された。また、日本近海に来遊するアジア集団のトドは、1990 年代以降個体数が増加傾向にあると推定されている。こうした状況から、本見直しでは準絶滅危惧 (NT) にランクを下げた。



提供:水産総合研究センター  
北海道区水産研究所

### エゾナキウサギ 絶滅のおそれのある地域個体群(LP) ➡ 準絶滅危惧(NT)

前回のリストで絶滅のおそれのある地域個体群 (LP) に掲載していた「夕張・芦別のエゾナキウサギ」は、直近の研究成果により、従来考えられていたほど孤立した個体群ではないことが分かってきた。一方で、本種はもともと生息地面積が狭く、存続基盤が脆弱であることに加えて、近年標高の低い地域において個体数が減少している可能性が示唆されていることから、今回の見直しでは準絶滅危惧 (NT) に選定した。



### 馬毛島のニホンジカ 新規 絶滅のおそれのある地域個体群(LP)

馬毛島 (鹿児島県) では開発に伴う森林伐採等が進行しており、同島に生息するニホンジカ個体群の生息に影響を及ぼしている。2011年の調査では255~277頭が生息していると推定されており、2000年の調査結果(571頭)と比較するとほぼ半減している。今後継続的な減少が見られた場合には絶滅のおそれがあると考えられることから、本見直しでは「馬毛島のニホンジカ」を新たに絶滅のおそれのある地域個体群 (LP) に選定した。

### 九州地方のツキノワグマ 絶滅のおそれのある地域個体群(LP) → 削除

前回のリストで絶滅のおそれのある地域個体群 (LP) に掲載していた「九州地方のツキノワグマ」は、最後の確実な捕獲記録が1957年であり、既に50年以上が経過している。また、1987年に大分県で捕獲された個体は、九州以外の他地域から持ち込まれた個体であることが判明している。これらを総合的に判断し、九州地方のツキノワグマはすでに絶滅していると考えられるため、今回のリストから削除した。

## 鳥類の注目される種のカテゴリー (ランク) と変更理由

### ダイトウノスリ 絶滅危惧 I A 類(CR) ➡ 絶滅(EX)

1970年代初めの観察記録以降の確認が無く、大阪市立大学が2001年から2011年にかけて実施したダイトウコノハズクとダイトウメジロの調査による長期滞在期間中にも本亜種と推定される個体は確認されていない。北大東島、南大東島のどちらも限られた森林しかない植生環境で、猛禽類が存在した場合には発見が容易であるにもかかわらず確認記録が無いことから、本亜種は絶滅したものと判断した。

## トキ 野生絶滅(EW) → 野生絶滅(EW) (変更なし)

2008年より佐渡島での野生復帰を実施し、2012年の春に初めて野生下での繁殖に成功した。IUCN(国際自然保護連合)のレッドリストカテゴリーによれば、「上位のカテゴリーに相当する基準が5年以上にわたって満たされない場合(すなわち下位のカテゴリーの基準を5年以上維持されることとなった場合)には、下位のカテゴリーへと移してよい。」と明記されており、5年以上の状況の継続が必要である。この基準を参考とし、現時点では、絶滅危惧IA類(CR)の定量的要件D(成熟個体数が1~50未満であると推定される個体群である場合)を5年満たしていないことから、前回と同じ野生絶滅(EW)とした。



なおIUCNによると、野生復帰個体を成熟個体としてカウントする条件は、「再導入した個体は生存できる子孫(viable offspring)を生産してはじめて成熟個体として数える。」と明記されており、「生存できる子孫」は分類群によっても考え方が異なると考えられるが、モンゴル等で実施されているモウコノウマの再導入の事例では、野外で生まれた個体が繁殖年齢(5歳)に達して初めて、成熟個体としてカウントされている。

## オガサワラヒメミズナギドリ 新規 絶滅危惧IA類(CR)

1990年代初頭のミッドウェイ諸島での観察記録を最後に20年間姿が確認されておらず絶滅したとされていた種が、小笠原諸島で1990年代以後に見つかった6個体の小型のミズナギドリと同種であることが、DNAと形態の分析により2012年2月に明らかとなったことから、オガサワラヒメミズナギドリとして今回新たに評価した。



本種は小笠原で1997年以後断続的に記録されており、最新の記録は2011年であることから、小笠原が現在の主要な生息地と考えられている。しかし、個体数は非常に少なく、観察頻度の低さから個体数250個体未満と推定されること、外来ネズミによる捕食圧や外来樹木の侵入による繁殖環境の改変が懸念されることから、絶滅危惧IA類(CR)に選定した。

## シマハヤブサ 絶滅危惧IA類(CR) → 情報不足(DD)

1920年代から1930年代に硫黄列島の北硫黄島でのみ標本が得られていた種であるが、その後50年以上記録が無く、近年行われた2度の調査でもハヤブサ類は確認できていないことから硫黄列島のシマハヤブサ個体群は絶滅したと判断した。しかしながら、伊豆諸島で確認されているハヤブサ類について亜種識別がされておらず、シマハヤブサが伊豆諸島に生息している可能性が残されていることから、情報不足(DD)とした。

## 爬虫類の注目される種のカテゴリー（ランク）と変更理由

### ニホンイシガメ

情報不足(DD) → 準絶滅危惧(NT)

本州から九州に広く分布し、前回見直しでもペット商取引を目的とした大量捕獲や生息地の減少の可能性が指摘されていたが、生息範囲が広く個体数や生息地の減少傾向を明確に示す情報は十分でなかったため、情報不足（DD）として掲載していた。



提供:安川 雄一郎 (爬虫類研究家)

しかし、近年になり外来生物のアライグマによる捕食被害の報告やクサガメとの交雑による遺伝子汚染の現状等の新たな知見が明らかにされ、絶滅のおそれが高まっていると判断されることから、今回の見直しにおいて準絶滅危惧（NT）に選定した。

## 両生類の注目される種のカテゴリー（ランク）と変更理由

### トノサマガエル

新規 準絶滅危惧(NT)

本州（関東平野から仙台平野にかけてと信濃川流域を除く）から九州に広く分布し、一般にもなじみ深い種であるが、近年では全国的な圃場整備事業等によって生息に適した水田環境が減少し、個体数の減少や生息環境の悪化が進んでいることから、今回新たに準絶滅危惧（NT）に選定した。



提供:松井 正文  
(京都大学大学院人間・環境学研究科)

なお、本種の分布しない関東地方周辺で見られるのは、「トノサマガエル」ではなく形態的特徴がよく似た「トウキョウダルマガエル（NT）」である。

## 昆虫類の注目される種のカテゴリー（ランク）と変更理由

※今回の見直しでは、昆虫類についても絶滅危惧Ⅰ類をさらにⅠA類（CR）とⅠB類（EN）に区分して評価を行った（前回は、絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）としてまとめて評価）。

### スジゲンゴロウ

絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN) → 絶滅(EX)

かつては水草の茂った池や水田等に普通に見られる種であったが、1980年代後半の記録を最後に近年の記録はまったく無い。ため池や水田等の人里に近い環境に生息し、よく目立つ種であることから人目に付かないまま長期間生息し続けていることは考えにくく、これまでの生息確認調査等によっても生息が確認できていない事から、絶滅したものと判断した。



提供:北野 忠 (東海大学教養学部)

### アカハネバツタ

### 新規 絶滅危惧 I A 類(CR)

主な生息地は海岸のマツ林周辺の草地等とされるが、内陸部においても同様の環境に生息し、定期的な草刈等が行われる採草地や薪炭林等が重要な生息地となっていた可能性が高い。このため近年の生活様式の変化による里地里山の管理の衰退に対応できず、激減した可能性がある。最後（1986年）に記録された新潟県の産地ではその後も生息が確認されておらず、また山形県や長野県等の過去に確実な記録がある県でもここ 20 年以上の記録がない。こうした状況から、本見直しでは新たに絶滅危惧 I A 類（CR）に選定した。

### オガサワライナゴ

### 新規 絶滅危惧 I A 類(CR)

小笠原諸島（父島・母島）固有種で、山地林縁に生息する。現在、極めてまれな種となっており最近の記録がほとんど無い。非常に減少している可能性が高く、グリーンアノール等の外来生物による捕食等が原因と考えられる。こうした状況から、本見直しでは新たに絶滅危惧 I A 類（CR）に選定した。

### コムズスマシ

### 新規 絶滅危惧 I B 類(EN)

かつて北海道から九州にかけて普通に見られた種で、ため池等のある程度の水深があり、開放水面のある水域に生息するが、近年ではため池の改修等により全国的に激減している。こうした状況から、本見直しでは絶滅危惧 I B 類（EN）に選定した。



### ゲンゴロウ

### 準絶滅危惧(NT) ↗

### 絶滅危惧 II 類(VU)

戦後までは北海道から九州にかけてごく普通に見られたが、高度経済成長期以降、急激に減少した。現在でも減少に歯止めがかかっていない状況で、多くの生息地が消滅しつつある。生息地に適した環境の減少、外来生物による捕食が大きな原因になっているほか、飼育目的の乱獲も減少の一因となっている。現在、東北地方では比較的多くの生息地があるものの、関東以西の個体群は生息地の消失や個体群の分断化により危機的状況にあることから、本見直しでは絶滅危惧 II 類（VU）にランクを上げた。



## 貝類の注目される種のカテゴリー（ランク）と変更理由

### キバオカチグサ

絶滅(EX) ↘ 絶滅危惧 I 類(CR+EN)

小笠原諸島の石灰岩地にのみ知られる一属一種の小笠原固有種で、戦後は生貝の記録がないことから絶滅したものと考えられていたが、2011年に生貝が確認された。しかし、生息状況は良好とは言えず、現状では絶滅の危険性が極めて高いことから、絶滅危惧 I 類 (CR+EN) に選定した。

### カタマイマイ

絶滅危惧 II 類(VU) ↗ 絶滅危惧 I 類(CR+EN)

小笠原諸島の父島と兄島に分布するが、父島の個体群は、近年、外来種のニューギニアヤリガタリクズムシによる捕食を受けて著しく生息地が縮小し、壊滅的な状態であることが明らかとなった。また、兄島の個体群もクマネズミによる捕食のため分布の縮小や生息密度の減少が生じている。このように両島での生息状況が著しく悪化していることから、本見直しでは絶滅危惧 I 類 (CR+EN) にランクを上げた。



提供:自然環境研究センター

### サキグロタマツメタ

新規 絶滅危惧 I 類(CR+EN)

本種は、国外では朝鮮半島から中国大陸沿岸部に分布し、国内では有明海や周防灘西部の狭い範囲にのみ分布するが、干潟の環境悪化に伴い日本国内に生息する個体群は以前から著しく減少していた。一方で、本来分布していなかった東北地方等で、国外からの移入個体が爆発的に増殖してアサリを食害し深刻な漁業被害が問題となっている。日本在来の個体群の存在はもはや明確に認識することができず、消滅したか又は国外からの移入個体群と混ざり合ってしまった可能性が高い。これらのことから、新たに絶滅危惧 I 類 (CR+EN) に選定した。

### ハマグリ

新規 絶滅危惧 II 類(VU)

かつては青森県の陸奥湾から九州地方にかけての内湾、河口域に広く分布していたが、1980年代以降の干潟の干拓や埋め立て、海岸の護岸工事等により生息環境が悪化したため日本各地で急減した。仙台湾や東京湾にも大きな個体群があったが、現在はほとんど見られなくなっており、各地の漁獲量は1970年代の5~20%まで落ち込んでいることから、今回新たに絶滅危惧 II 類(VU)に選定した。



提供:木村 昭一  
(三重大学大学院生物資源学研究所)

なお、食用に「ハマグリ」として国内で流通しているものの多くは、中国や韓国等から輸入される外来種の「シナハマグリ」や、国内にも自然分布する外洋性の「チョウセンハマグリ」である。

## その他無脊椎動物の注目される種のカテゴリー（ランク）と変更理由

### カクレサワガニ 新規 絶滅危惧 I 類(CR+EN)

2007年に新種記載された種で、アマミミナミサワガニ(VU)に近縁な種であり、沖縄県の限られた場所でのみ生息が確認されている。発見当初から生息個体数が非常に少ないと考えられていたが、2010年に行われた調査では本種が確認されており、生息地が道路拡張工事等により簡単に消滅する可能性もあることから、絶滅危惧 I 類(CR+EN)に選定した。



### シオカワヨコエビ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) ↘ 準絶滅危惧(NT)

沖縄本島の塩川において初めて確認され、1991年に新種記載された小型のヨコエビである。最初の確認地の塩川は、森林伐採による水質悪化の影響があり絶滅が懸念されていたが、前回見直し以降、沖縄県内の他地域の干潟や汽水域においても生息が確認されたことから、準絶滅危惧(NT)にランクを下げた。しかし、沖縄全体の汽水域の開発により生息環境の消失が懸念されている。

### ヒガタスナホリムシ 絶滅危惧 I 類(CR+EN) ↘ 準絶滅危惧(NT)

1975年に千葉県一宮川河口の砂質干潟から発見され、1981年に新種記載された種である。最初の確認地からはその後生息が確認されており、絶滅が心配されていたが、近年の調査で沖縄県での生息が確認されたほか、宮崎県、大分県、和歌山県等の西日本の太平洋側の各地でも新たに生息が報告されたことから、本見直しでは準絶滅危惧(NT)にランクを下げた。

## 植物 I（維管束植物）の注目される種のカテゴリー（ランク）と変更理由

### コバヤシカナワラビ 絶滅危惧 I A 類(CR) ↗ 絶滅(EX)

宮崎県小林市に数株の自生があったが、森林伐採のために消失した。前回の見直しの時にすでにほぼ絶滅状態だったが、森林の成長とともに回復する可能性を考えて絶滅危惧 I A 類(CR)と判断していた。しかし、その後の生育確認調査等によっても生育が確認できていないことから、本見直しでは絶滅したものと判断した。

### ミズスギナ 絶滅危惧 I B 類(EN) ↗ 絶滅危惧 I A 類(CR)

池沼の水辺・水中に生え、渇水時には陸生形となる日本固有の植物。ため池の護岸工事、管理放棄等により減少が続いており、自生記録があるほぼすべての県でレッドリストに掲載され、危機的状況にあることから、本見直しでは絶滅危惧 I A 類(CR)にランクを上げた。

**アキノハハコグサ**                      **絶滅危惧Ⅱ類(VU) ↗ 絶滅危惧ⅠB類(EN)**

山地のやや乾いた明るい草地（路傍・斜面・崖地等）に生育する。かつては各地に自生地があったが、草地の遷移、道路工事等のために減少し、現在ではきわめて希少な植物となっている。青森県から鹿児島県まで、自生記録があるほぼすべての都府県でレッドリストに掲載されている。これらの状況から、本見直しでは絶滅危惧ⅠB類（EN）にランクを上げた。

**ウラジロコムラサキ**                      **絶滅危惧ⅠA類(CR) ↘ 絶滅危惧ⅠB類(EN)**

小笠原諸島にのみ生育する日本固有種。台風等の自然災害等による生育環境の変化、外来種のノヤギ、クマネズミ等による食害等により減少し、前回見直しでは絶滅危惧ⅠA類（CR）に選定されていたが、小笠原諸島でのノヤギ駆除の取組によって野生個体群が回復したことから、本見直しでは絶滅危惧ⅠB類（EN）にランクを下げた。



提供：自然環境研究センター

**キリタチヤマザクラ**                      **新規 絶滅危惧ⅠB類(EN)**

1999年に九州の霧立山地の白岩山で発見され、2001年に新変種として発表された。白岩山に約百本の成木が確認されているのみで、自生地・個体数が局限されており、さらにシカの食害によって更新が阻害されていることから、今回新たに絶滅危惧ⅠB類（EN）に選定した。



提供：斉藤政美（宮崎県総合博物館）

**ヒロハナライシダ**                      **新規 絶滅危惧ⅠB類(EN)**

本州（岐阜・奈良・山口）、九州（福岡・熊本・大分・宮崎）の山地林床に生育する。シカ食害の影響により減少し、奈良県、福岡県、宮崎県、大分県のレッドリストでは絶滅のおそれのある種に相当するランクに選定されている。熊本県でも、シカ食害により減少していることが確認され、山口県、岐阜県でも最近の確認記録がなく、危機的状況にあることから、今回新たに絶滅危惧ⅠB類（EN）に選定した。

## 植物Ⅱ（維管束植物以外）の注目される種のカテゴリー（ランク）と変更理由

### ヒカリゼニゴケ（蘚苔類） 絶滅(EX) ⇨ 絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

1959年に報告された種で、最後に確認されてから約50年が経過したことと、唯一の生育地であった熊本県の石灰洞窟の崩落により生育地が消失したことから絶滅したと考えられていた。2011年に近隣地域で生育が確認されたが、人為的な攪乱により絶滅する危険性が高いことから絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）に選定した。

### チュウゼンジfrasコモ（藻類） 絶滅(EX) ⇨ 絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

栃木県の中禅寺湖のみにかつて生育していたが、その後の調査では生育が確認されおらず絶滅したと考えられていた。しかし、近年になり栃木県と兵庫県で再発見され、分布が局限されていることから絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）に選定した。

### コバノシロツノゴケ（地衣類） 絶滅(EX) ⇨ 絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

高知県で1931年に発見されて以来、その後採集された記録がなかったことから絶滅したと考えられていた。しかし、2012年の調査において屋久島の2ヶ所で生育が確認されたことから絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）に選定した。



### ヒュウガハンチクキン（菌類） 絶滅(EX) ⇨ 絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

宮崎県で1934年に確認されていたが、その後、生育地のマダケ伐採等により絶滅したと考えられていた。近年、宮崎県で再発見されたが、確実な産地は1ヶ所であることから絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）に選定した。

